

遊び心を起点に商品開発

町田 一実



索しようと考えたのだった。混とんとした時代でも視野を三六 度に広げて見渡せば生き残れる道はまだ残っている気がしたし、このような時代だからこそ経営者は汗を流す事が必要と

建設業界の構造不況が長引いているが、向こう合わせの船釣りでは駄目だと思つて四年前から商品開発を始めた。しかし、生き残りをかけて開発するのではプレッシャーが大き過ぎるし、さりとて普段の業務の合間、資金繰りを縫って行う開発ではまともな商品化は望めない。そして、不況に喘ぎながらも、ようやく自信を持って提供できる商品が完成した。仕事という概念を外し趣味を兼ねて開発した間伐材利用の「角ログハウス」である。

開発のコンセプトは、遊び感覚で誰でも楽しく作れること、不用品を積極的に取り入れること、電力使用は極力抑えること、できるだけ身体を動かして生活する構造にすること、とした。ストレスに疲れた男の隠れ家となりそうな、癒し系セカンド住宅に適していると思つている。価格も軽自動車を買つたら釣り銭がくる額に設定にした。

山林が荒廃している。林業従事者の高齢化が進み、後継者にはそっぽを向かれていますと聞く。経済的に生活の基盤を築ける収入があれば後継者は育つと思うのだが、それが疑問視されている。出荷材にするには三代かかるといわれる。生活するにはそれ相応の経済的基盤を必要とし、現代では三代という時間は確かに長すぎる。良木を育てるには下刈り、

枝打ち、間伐、雪害防止と休む暇もないほどの労力を必要とする。それらの労働にはスズメの涙ほどの助成金があると聞くが、間伐材に付加価値をつけ、数多くの人に利用してもらえる商品を開発できれば、必ずや林業が成り立つようになるのではないかと考えた。そして、間伐、下刈りが進めば、日本の山林荒廃は防げるのではないかと、土砂や山腹の崩壊も防げるのではないかと、とも思つた。自分の考えに酔う自分を抑えながら、次第に商品開発の夢が熟成していった。

林業家でも工事ができる安易な工法とし、短期間で完成できる部品組み立て接続工法を採用。特許庁に申請した実用新案登録の工法も去る一月三十日付で登録を完了、事実上の船出となった。山形県でも推進している「エコショップ山形」にも登録したが、建設物件では珍しい商品となった。商品開発そのものは金を生まない。商品化しても即ブレイクするものでもないことは分かっている。しかし、本業の建設業の方が固定費や人件費などの削減努力をしても先細りするのが目に見えており、いずれ淘汰される日が来るのではないかと考えれば不安で安眠もできなくなる。このため、自分の進む道を見据え、目標を定めながら、生き残りをかけて取り組めるものを模

考えた。リストラを「減らす」「省く」と解釈する事と同時に、自分たちすべての社員が一人丸となって進めば「欠員なきリストラ」が可能になるはずであり、社員の間には「希望」という知恵の泉を構築できると考えたのだった。自社で値段を設定できて、かつ販売先を探せるオリジナル商品を持つ事を優先順位の第一位に据える考え方でやってきた。

次に取り組んだのは輸入品の独自販売である。韓国からアウトドアストープを輸入することにした。国内向けに自社で改良し、当社ブランドでインターネットにて販売している。これも出荷数が百台を越す実績をあげている。田舎でも販売元になれる時代をみすみす逃す手はないと思つて、ホームページやオークションなどの流通チャンネルを駆使している。販売元同士の競合がない商品ではあるが、顧客の絶対数が少なく、大手企業は手を出さない隙間産業とも思える商品である。酒田港という地の利を生かし、発注、送金、輸入通関、運搬、販売、発送とすべてを自社で行っている。売上額としてはまだまだだが、「自社オリジナル商品の独占販売」ができる道が徐々に形成できればいいと思つている。

(上山市宮脇、(株)町田工務所社長)